



TITLE:

<Book Review>W. G. J. Remmelink, Emperor Pakubuwana II, Priyayi & Company and the Chinese War. Leiden : Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde, 1991 forthcoming.

AUTHOR(S):

土屋, 健治

---

CITATION:

土屋, 健治. <Book Review>W. G. J. Remmelink, Emperor Pakubuwana II, Priyayi & Company and the Chinese War. Leiden : Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde, 1991 forthcoming.. 東南アジア研究 1990, 28(3): 442-444

ISSUE DATE:

1990-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56410>

RIGHT:

期的な人類学的調査を必要とするのだろう。西野も正しく強調するように、プサントレンの実態は極めて多様であり、今後更に綿密な民族誌が必要とされる筈である。西野のこの著作は、その具体的な記述の中にそうした将来発展可能な様々なテーマを盛り込んでおり、その可能性は著者自身の限定された結論に止まらず、読者自身が自由に発展できるものである。その意味でこの研究は後続の研究の可能性を既に様々な形で内包しているのである。

### 参考文献

- Castles, Lance. 1966. Notes on the Islamic School at Gontor. *Indonesia* 1 (April).  
 Dhofier, Zamakhsyari. 1982. *Tradisi Pesantren: Studi tentang Pandangan Hidup Kyai*. Jakarta: LP3ES.  
 福島真人. 1986. 「イスラムリーダーにおける信念と演技——ジャワ伝統派イスラム、意識とその変容」『季刊人類学』17(3).  
 小林寧子. 1988. 「19世紀末のジャワのイスラム教育とプサントレン」『アジア経済』29(10).  
 Orr, Kenneth et al. 1977. Education for This Life or for the Life to Come: Observation on the Javanese Village Madrasah. *Indonesia* 23 (April).  
 Rahardjo, Dawam, ed. 1974. *Pesantren dan Pembaharuan*. Jakarta: LP3ES.  
 Steenbrink, Karel. 1974. *Pesantren, Madrasah, Sekolah: Recent Ontwikkelingen in Indonesisch Islamonderricht*. Krips Repro Meppel.  
 (福島真人・東京大学 東洋文研)

W.G.J. Remmelink. *Emperor Pakubuwana II, Priyayi & Company and the Chinese War*. Leiden: Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde, 1991 forthcoming.

本書は1725年から45年にかけてのジャワ・マタラム王国史の研究である。著者は本書により1990年6月にライデン大学から博士号を授与された。著者はまた、現在「日蘭学会」の常任理事として在日している。なお本書は私家版として出版されたが、91年中にもライデン大学王立言語民族文化研究所から公刊される運びである。

本書が編まれるに至る経緯はオランダ人東洋学者の学問的な経歴の幅の広さを示していて興味深い。

著者ははじめライデン大学で Sinology を学び、1972年から74年にかけては京都大学人文科学研究所の島田虔次教授について儒家思想の研究をし、修士論文は戴震（1724～77）に関するものであった。ジャワへの関心は、ガジャマダ大学で歴史及びオランダ語の教師として着任した1977年以後のことであったが、結局そこに84年まで7年間滞在し、本書の中核をなす「中国人反乱」に関する部分を書き上げた。私は1989年に、国際会議の事務局の仕事と一緒に往く機会があったが、著者が中国語、日本語、インドネシア語、ジャワ語に習熟し、それぞれの文化と社会について該博な知識をもつことに感嘆することしばしばであった。

さて、著者はたまたまジャワで仕事をする機会があり、中国史の知識をジャワ史研究で生かす上で、1740年から43年にかけて全ジャワをまきこんでくりひろげられた大反乱（いわゆる「中国人反乱」）へと関心が向けられたときりげなく述べているが、このテーマの選択はジャワ史研究の新しい局面を拓くものとして、まことに時宜に適ったものであったと思われる。そのことに触れるのに先立って、先ず本書の構成を簡単にみておこう。本書の目次は次の通りである。

### Introduction

- I. King, Priyayi and Company
- II. The Eclipse of Danureja
- III. The Rise and Fall of Arya Purbaya
- IV. The War, Part I
- V. The War, Part II
- VI. The Babad

本書が扱う時代は、ジャワのマタラム王国でその第八代目の王位にパクブオノⅡ世（在位1726～49）が就いているほぼ20年にわたる時代である。その主要な舞台になるのは、当時の王都であったカルタスラの王宮であるが、それとともに、オランダ東インド会社の総督府のあるバタビア（現在のジャカルタ）、会社の出先でマタラム王国との折衝の窓口をなすスマラン、さらに、当時マタラム王にとって最大の強敵であったチャクラニングラットⅣ世の支配下にあるマドゥラ島も、重要な役割を担っている。このほかに、マタラム王の勢力下にある各地の動向や、当時、米の産出地帯としてとりわけ重要であっ

たジャワ島北海岸のテガル地方、さらに、18世紀以来マタラム王家の王族高官の流刑地とされてきたセイロン（スリランカ）も、この時代のジャワの歴史の動向を決める上で、いずれも重要な舞台をなしている。

本書は第一章でジャワの王国における王とプライ（貴族）とオランダ東インド会社の関係を、制度論と文化論の両面において解明している。王国はつねに不安定であり、婚姻関係を軸とするパトロニークライアントのうつろいやすいネットワークによって辛うじて秩序が保たれている。会社は本来経済的取引にその活動を限定することを欲していたにもかかわらず、秩序の安定を求めるために次第にジャワの内政に足を踏みこみ、バランスライザーとして内政のあれこれの当事者の立場にひきずりこまれていく。この状況は、引き続き第二章、第三章に詳しく論ぜられる。第二章の Danureja, 第三章の Arya Purbaya は、いずれも王に代って王国の行政を執り行う Patih（大臣）の職にあった者で、現実の権力はここに集中している。両者ともに策略を尽くしてこの地位を襲い、ほしいままの権謀術数をふるい、やがて自ら仕掛けた陰謀に自ら陥るようになり、没落していく。ここでは、会社の果たす役割と並んで、わずか16歳で王位に就いたパクブオノⅡ世が次第に一箇の政治主体として、それ自身の意思を発揮する状況が詳らかにされている。これらの過程を通じて、ジャワにおける陰々滅々たる「噂の政治」（「噂」が一人歩きをしそれをめぐって事件の連鎖が引き起こされ、遂に破局に至る）のすさまじさが、まことに生き生きと描写されている。

マタラム王国の内政は、宮廷内の文字通りの内政にとどまらず、18世紀中を通じて年ごとに宮廷外さらにはマタラム王国外の政治的ファクターと連動して展開されるようになる。それは、内政がたちどころに外界にさらされて内と外とのまことに入り組んだ関係を作り出し、たとえば、もつれにもつれた糸玉のような状況を呈していく。それはついに1755年に至って、マタラム王国の大分裂という事態へと引き継がれ、57年の再分裂を経て、ようやく一段落する。

本書はその大分裂に至る直前までの状況を扱っているが、この過程の外的な政治的ファクターのうち

最大のものは「中国人反乱」であった。パタビアから始まりジャワ島北海岸一帯をまるで燎原の火のようになめつくしたこの反乱は、雪だるまのように反乱参加者を増やしながらついにカルタスラの王宮へ殺到し1742年6月30日にはこれを陥落せしめる。本書の第五章と第六章は、この反乱の発端からその結末に至る過程が、まるで絵巻物をひもとくように精彩のある筆致によって描かれている。

先にも述べたがこの反乱の全過程をこれだけ掘り下げた研究はいままでになく、トピックとして取り上げるに値するだけでなく、時宜に適ったものでもあろう。すなわち、戦前に威勢をきわめたオランダのジャワ歴史研究の大伝統は戦後一端中断されたが、1970年代半ばに、Ricklefs がジャワの大分裂に関する作品を著して後、Kumar, A. Day, Carey, Nagtegaal などが19世紀末までのジャワ王国の歴史について次々と作品を生み出してきた。<sup>1)</sup>このような蓄積が積み重ねられる中で、たんに研究対象が広がって未開拓のテーマが取り組まれるだけでなく、対象へのアプローチをめぐっても、新しい問題提起がなされるようになってきた。

本書の第六章は、著者のこのような問題意識がもっともよく示されている。ここまでの章がもっぱらオランダ側の原資料に基づいて歴史を再構成したのに対し、この第六章は、同じ時代の同じ事件がマタラム王国の年代記（Babad）ではどう描かれているかを扱っている。そして、ジャワの年代記が本来的

#### 1) 例えば次のような作品である。

1. Ricklefs, M.C. *Jogjakarta under Sultan Mangkubumi 1742-1792*. London. 1974.
2. Kumar, A. *Javanese Court Society and Politics in the Late Eighteenth Century: The Record of a Lady Soldier*. *Indonesia* 29: 1-46; *Indonesia* 30: 67-111. 1980.
3. Carey, P. *Changing Javanese Perceptions of the Chinese Communities in Central Java, 1755-1825*. *Indonesia* 37: 1-47, 1984.
4. Day, J.A. *Meaning of Change in the Poetry of Nineteenth-Century Java*. Ph. D. thesis, Cornell University. 1981.
5. Nagtegaal, L.W. *Diamonds are a Regent's Best Friend: Javanese Bupati as Political Entrepreneurs*. Paper for the Vth Dutch-Indonesian Historical Conference. 1986.

に有している特性、すなわち、神意の顕現に基づく王（王国）の正統化と、ジャワ人は如何に振る舞うべきであるのかという教訓性が指摘される。ここでは、年代記はそれ自身としての形と力を備えており、オランダ語の第一次資料によってその（年代記の）内容が裏書きされたり、歴史記述の誤りが検証されたりすることはないのである。著者は、この時代を扱ったジャワのさまざまな年代記とりわけ「ジャワ年代記」を、「歴史実証主義」にてらしてその真偽を測定したり、あるいは歴史記述にいささかのふくらみを添える「副読本」として読むのではなく、まさに〈物語〉そのものとして読むべきであると主張している。著者は、「歴史か文学か」というカテゴリーの設定そのものについて疑義を呈しているのである。このような問題提起は、ジャワに関心をもつさまざまな研究者が、研究者の文化的背景や専攻領域や国籍を越えて、これから考えていくに値する課題であろう。<sup>2)</sup>

本書は、ジャワ史上の激動を詳細な史料に基づいて生き生きと再現し、併せて、方法論的な問題を新しく提起することで、ジャワ王国史の研究に確かな一歩を印しており、これから広く読まれていくことになるであろう。しかしながら、本書を読んで、第二章から第五章にかけての歴史叙述がまことに迫力にみちているのに対し、肝心の第六章がこれによく抗してそれ自身の重量感を示し切れていないという感想を抱くのは何故であろうか。第六章は本来もっと手厚く叙述すべきところであるように思われる。もう一つ物足りないことは、大反乱の過程で反乱軍そのものの内実や動向が不明のままであることである。史料等の点で望むべくもない点かも知れないが、ここがさらに解明されればと念ずる次第である。

（土屋健治・東南ア研）

2) オランダにおけるジャワ研究の大伝統については拙稿を参照。

土屋健治、「19世紀ジャワ文化論序説——ジャワ学とロンゴワルシトの時代」『東南アジアの政治と文化』土屋健治・白石隆（編）所収。東京大学出版会。1984。

Jane Drakard. *A Malay Frontier: Unity and Duality in a Sumatran Kingdom*. Ithaca, New York: Southeast Asia Program, Cornell University, 1990, 205 p, maps, ill. bibl. index.

Several seminars and conferences have been held on the “region” conveniently called “the Malay world.” One seminar might take “Malay civilization” as its major topic, while another might deal with the questions of “Islamic civilization in the Malay world.” In the 1970s Unesco also had “Malay culture” as one of its projects. But what is the meaning of the “Malay world”? Could it refer to the notion of ethnicity? If it does, then the less than enthusiastic attitude of the Indonesian government to this concept is understandable. Malay is, after all, only one of the many ethnic groups in Indonesia. Perhaps we should not look at it from this narrow perspective. But it cannot be seen from the political perspective either. Despite its potential impact on the political sphere, the “Malay world” might be better treated initially as a cultural concept. If so, where does this “world” end and “the other world” begin?

The strength of an ideology might be best seen in the way it solves its internal crises and responds to external challenges. The unity of a cultural world is, perhaps, better viewed from the perspective of its frontier zones. This is what Jane Drakard attempts in *A Malay Frontier*. Instead of looking at the notion of the “Malay world” from its presumed centers, the Palembang-Malaka-Johor axis or the Pagaruyung myth, she takes the history and the traditional historiographies of Barus as the focus of her study. Barus (now a small town on the northern west coast of Sumatra) is a genuine frontier cultural zone. A coastal town, Barus had, from as early as the tenth century, been involved in the long-distance trade of the